

ダーン、ダーン、ダダーン！いつもは静かな山の中に鉄砲の音が響きわたった。そして、時々ドーンという大砲の音が聴こえ、しばらくおいてドカーンという大砲の弾が破裂する音が響いた。

イトーの乗った馬は、この音に驚き、イトーを振り落とす。

「どうしたんだい、この音は！？戦争がはじまったの？」

バードは暴れる馬をなだめながら、落馬したイトーに声をかけた。

いつの間に現れたのか、ひとりのお坊さんがイトーを見ている。

「お前さまがた、どちらから来られたのかな？見れば、日本人には見えないご婦人も一緒のようだが。実はたった10年前、この峠は戦場になったんだよ」

明治元年8月、新政府軍と旧幕府が戦った戊辰戦争はこの峠にもその最後の火の粉が飛んできた。米沢藩は幕府側につき、この13峠を越えて、新潟に出兵していた。

新潟の長岡藩は幕府側についたものの、新発田藩は新政府軍に寝返り、戦況は次第に幕府側に不利になっていた。

何しろ、新潟には海がある。船にのった薩摩、長州、広島、加賀、など各地から船でどんどん新政府軍の兵隊がやってくる。迎え撃つのは長岡藩、会津藩、米沢藩などだ。時代は大きく新政府軍側に傾きつつあった。

長岡城が、新政府軍に攻め落とされると、米沢藩の兵士は、自分たちの藩を守るため、13峠に戻ってきた。最初の峠、鷹巣峠と榎峠までは新潟だが、大里峠は米沢藩になる。

米沢藩を死守するため、榎峠に陣地が築かれた。

政府軍は、部隊を3つの小隊に分けて、米沢藩の陣地を攻めることになった。八月十二日夜明けと共に攻撃開始。第一小隊は、米沢街道を進軍して榎峠を攻撃する本道軍、榎峠を南方に迂回して後方を狙う右翼軍、そして荒川を渡って川沿いに進む片左翼軍の三つに分かれて進軍した。

狭い峠道を進む本道軍は、第一陣、第二陣、予備軍の順で波状攻撃をしかけることになった。峠道といっても道は道、当然一番早く米沢藩とぶつかる。

「誰か、この峠に詳しい者はおらぬか？」

隊長が聞いた

「あ、それは治助だべな。何しろ、近くのお寺に弟子入りしてたもんな」

「んだ、んだ」

「治助はどこにいる！」

「オラです。この峠何度か来たことがあります。この近く女川のお寺に弟子に入ったことがあります。したども、詳しいと言われても」

新発田から農民兵として参加している治助が答えた。

「治助、わかったわかった。いいか、お前はあくまで偵察だ。この道をそのままいくのではなく、道の脇の藪に隠れながら、相手の居場所を探して来い。無理しないで行って来い！」

「わかりました」

治助は、峠道の横にある木や岩に隠れながら、ゆっくりと進み出した。しばらくすると、パンパンパン！と乾いた銃声が聞こえた来た。

そして、治助の体が血だらけになって、峠道に転がり落ちてきた。

「やばい、一旦退却だ！」

隊長の命令で、第一陣は峠道を戻ってきた。そして、第2陣の待機する所まで下りて来てしまった。



これに怒ったのが第二陣の薩摩藩隊長の村田経芳だった。部隊を前進させると共に自分で大砲を操り支援砲撃を開始した。のちに日本軍の最初の国産小銃となる村田式銃を開発した男で、大砲の扱いも抜群にうまい。頂上付近の米沢藩が潜んでいる当たりに向かって、どんどん大砲を撃ち込んでいく。それまで高いところから仕掛ける米沢藩の有利な戦いが一気にひるんだ。

しかも、部隊は狙われやすい峠道を進まずに直接坂を登り山頂を目指すことになった。

山頂の陣地で勇戦していた米沢藩兵だったが人海戦術で道無き坂からも攻め登ってくる政府軍の攻撃を支えきれず、米沢藩は遂に陣地を放棄して敗走する。

敗走がはじまると、米沢藩はつるべ落とし、一目散に逃げていく。追撃する政府軍は、ついに榎峠の出口にある沼部落に置かれた米沢藩の本陣を攻略、米沢藩兵は自分たちの藩領である大里峠へと追い込まれた。

その沼部落に、バードとイトーは向かっている。先導に立つのは女川村弘長寺の63世である良成和尚だ。峠を降り、平らになりかけたところに、石碑があった。

「これが、10年前、わだしが建てた供養塔です。わだしの弟子で、明治政府側について戦った治助と、榎峠の戦いで死んだ12人の米沢藩士をまつています。死んでしまえば、敵も味方もないですから」

お経をあげたいという和尚をおいて、2人は沼部落に向かった。